

# THE CHANGES IN LEARNING STRATEGIES OF JAPANESE JUNIOR HIGH SCHOOL STUDENTS: THROUGH ANALYZING THE CLASSROOM INSTRUCTIONS

中学生の学習方略の変容 — 授業分析を通して—

所属校：葛飾区立葛美中学校  
氏名：小川 登子  
派遣先：早稲田大学教職大学院

キーワード：学習ストラテジー（方略）・記憶・認知・補償・メタ認知・情意・社会的

## I 研究の目的

本研究は1年間に及ぶ記録を基に、中学生の英語学習に対する学習方略の変容とそれを促す授業形態の相関関係を第二言語習得理論の観点から探り、筆者自らの授業分析を行うものである。次の2点を研究課題とする。(1)生徒はいつ、どの学習ストラテジーを最も多く使うのか。(2)生徒が使う特定の学習ストラテジーは教師のどのような指導によって促されるのか。

## II 先行研究

### (1) 学習ストラテジー（方略）とは何か

「学習をよりやさしく、早く、楽しく、自ら進んで、そして、効果的に、新しい状況にも対処できるように行う特定の動作」(Rebecca, L. Oxford, 1990)<sup>1</sup>。

### (2) 学習ストラテジーの種類と定義 (表1)

ストラテジー	定義
記憶	効率的に記憶するために使うストラテジー。
認知	学習者自身が目標言語の操作に直接働きかけるストラテジー
補償	自分の言語能力の不足を補うために使うストラテジー
メタ認知	自分の学習過程を把握し効果的な学習ができるように調整をするストラテジー
情意	コミュニケーションを行う際に渦巻く感情をコントロールし、把握するストラテジー
社会的	他者と協力し理解を深めるストラテジー

## III 研究方法

### 1 データ収集

- (1) 被験者：東京都立中学校3年生62名
- (2) 時期：平成19年5月～平成20年2月
- (3) 分析区分：5月・7月・9月・12月・2月
- (4) 使用したデータのタスク：

- ・タスク1：生徒による記述データ（面接テスト後に書く振り返りシート・テストノートの中の感想・学期末に記入する自己評価カード<sup>2</sup>）
- ・タスク2：授業で行った活動（面接テスト・音読テ

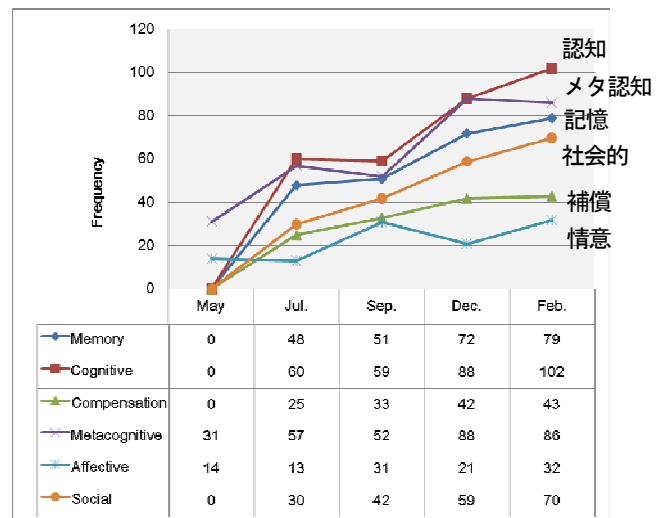
- スト・ディクテーションテスト・スタディペア<sup>3</sup>)
- ・タスク3：家庭学習（授業ノート・ライティングノート・エッセイノート<sup>4</sup>・スパイラルワークシート<sup>5</sup>)
- ・その他：「英語通信」（タスク1の感想を掲載した自作の新聞）

(5) 分析方法：表計算ソフトを用いてOxford(1990)による学習ストラテジーの定義に基づいて6種類のカテゴリー(表1)に分類し、時系列的变化とタスクとの相関関係から分析を行った。

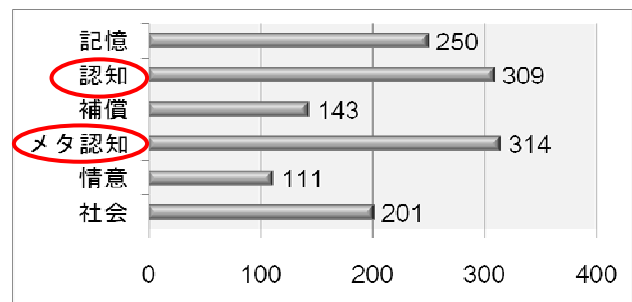
(6) 分析方法の信頼性：3回行った。

## IV 分析結果

### 1 各ストラテジーの使用頻度の変化 (図1)



### 2 学習ストラテジー別 最高頻度の比較 (図2)



→ 研究課題(1)に対する答え

<sup>1</sup> Oxford, R. (1990) *Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know*. New York: Heinle & Heinle Publishers. p.16.

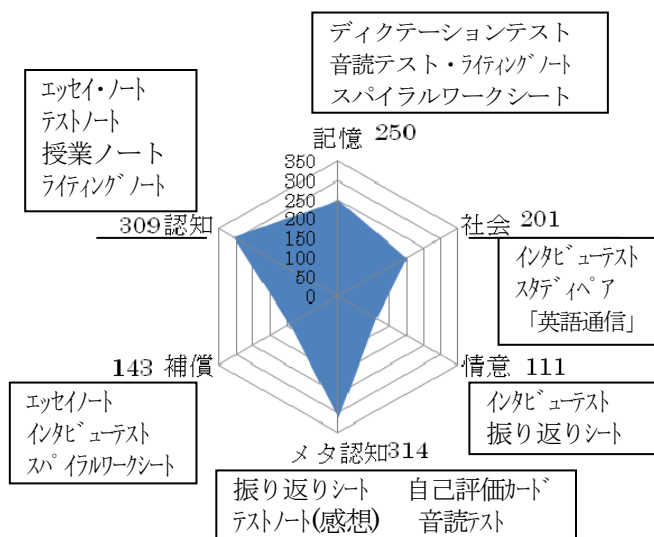
<sup>2</sup> 北原延晃 (1992).

<sup>3</sup> 北原延晃 (2001) ペアワーク

<sup>4</sup> 本多敏幸 (2005) コンポノート 参考

<sup>5</sup> 北原延晃 (2001).

### 3 タスクとストラテジーとの相関関係図 (図3)



→ 研究課題(2)に対する答え

## V 考察

### 1 高い頻度を示したストラテジー

最も高い頻度を示したのはメタ認知と認知ストラテジーであった。自己評価カードや振り返りシートには、共通して自分の学習過程を把握し効果的な学習ができるように調整するというメタ認知の性質が見られた。認知ストラテジーに分類されたタスクには学習者自身が言語の処理や操作に直接関わり促す性質があった。記憶ストラテジーに分類されたタスクであるライティングノートなどは、学習者が効率的に記憶するために使うストラテジーを促す性質であることがわかった。英語が得意な生徒とそうでない生徒との教え合い学習を形成するスタディペア、学習者間のフィードバックと高め合い効果を目指す「英語通信」は社会的ストラテジーを促すものであった。メタ認知・社会的・記憶・認知ストラテジーの機能別にタスクを与え、そのタスク数が多いことが高い頻度を抽出する要因となったのではないかと考える。

### 2 低い頻度を示したストラテジー

補償ストラテジーと情意ストラテジーの使用頻度が低かった。補償ストラテジーは自分の言語能力の不足を補うために使うストラテジーであるが、図3によると、言語知識の処理と学習過程の振り返りのタスクを多く与えていた一方で、得た言語知識を活用して産出するタスクが少なかったことが要因と思われる。

では、どのような産出タスクが足りなかったのだろうか。エッセイノートは自分の言葉で書いて表現するタスク、インタビューテストは聞いて理解し、自分の言葉で話すタスク、スパイラルワークシートは既習の文法と語彙を反復練習するタスクであることから、既

習の言語知識を活用して推測・推論しながら文章全体の概要を把握する「読解」のタスクが不足しているのではないかと考えられる。情意ストラテジーは生徒による自由記述からデータを抽出したため、生徒によって記述量に差が生じ、使用頻度を体系的にとらえることができなかったことが要因ではないだろうか。今後は自由記述欄の他にチェックリストを作り、頻度を体系的にとらえていきたい。

### 3 何が生徒の学習意欲に影響を与えたのか

生徒による記述データから、英語に対する意識が‘fun’から‘interesting’へと変わっていることが窺われた。具体的にできるようになった自己の能力に対する自信と、「自分もできるのではないか」という期待感も見られた。また、「先生に褒められた。嬉しかった。」という感想は、教師が個々の生徒の学習過程をモニターすることの効果といえるであろう。これらは情意ストラテジーを促すことにつながる。スタディペアおよび「英語通信」によるフィードバックは教え合い高め合う社会的ストラテジーであるとともに、認知やメタ認知を効果的に促すための学習環境作りであることが明らかとなった。記述量が7月から著しく伸びている背景としては教師への信頼感が挙げられる。目の前の教師を信じ、それが記述量とストラテジー使用頻度に反映したのではないだろうか。こうしたことから、情意と社会的ストラテジーは生徒の学習意欲を促す効果となるとともに、言語処理や学習過程の振り返りタスクと関連させた指導の重要性を確認した。

## VI 結果

生徒はメタ認知と認知ストラテジーを最も多く使用していた。先行研究においても、伸びる学習者はこれら2つのストラテジーと補償ストラテジーを最も多く使うことが明らかとなっている。本研究における授業分析では、補償ストラテジーを促すタスクに改善の必要性を見出した。指導においては個人の言語学習に直接働きかける記憶・認知・補償ストラテジーに基づいたタスクとともに、生徒の学習意欲を促す社会的と情意ストラテジーに基づいたタスクを適切に与えることの必要性を明らかにすることができた。

## VII 教育的示唆

本研究を通して、教師のどのような指導が生徒の学習ストラテジーの使用を促すことにつながるのかを明らかにすることができた。学習ストラテジー理論に基づいて教師が自らの授業分析を行うことは、学校の実践において活用が期待できると考える。